

梨をつくる

2020.10.5

私の両親は福島で梨をつくっている。家のまわりには一面梨畑が広がっている。二人でもう40年以上も梨をつくり続けている。

梨は、4月下旬になると白くきれいな花を咲かせる。花が咲くと細い棒の先に綿毛のようなものをつけた道具を手にして「花粉交配」という作業を始める。梨の花には虫がつかないので人の手に頼るしかない。花々一つ一つにあいさつでもするように、「ポンポン、ポンポン」と数え切れないほどの木に、競い合うように咲き誇っている花を軽くたたいていく。

私も何度か手伝ったことがあったが、すぐに首が痛くなってしまい長続きしなかった。二人はこの作業を毎年毎年何時間も行っている。おかげで我が家はゴールデンウィークに出かけたことが一度もない。

花の季節が終わると、小さなかわいい実をつける。今度はこの大事な大事な実を守るために、袋をかぶせたり消毒をしたりと、二人で朝早くから夕方遅くまで広大な梨畑を歩き回っている。

初夏になると暖かくなってくるが、急に朝方冷え込むことがある。こんなときは大変である。一本一本の木に、重油を燃やすストーブのようなものを運ばなくてはならない。これを怠ると梨は全滅である。

暑い夏がやってくると、梨はどんどん生長していく。もうそろそろ食べられるかなというときに、雹（ひょう）が降ってきたり台風がやってきましたら、今までの苦労は水の泡である。一日たりとも油断はできない。毎日天気予報は欠かさず見るようになる。

9月。手塩にかけてきた梨の収穫である。一つ一つ大事に傷をつけないようにもぎ取っていく。そして、ダンボールの箱に大事に丁寧に一つ一つ入れていく。この時期には毎日夜遅くまで作業が続く。よく父親が「今年の梨は小さくてだめだ」とか「今年の梨は甘くない」などという年があるが、私にはそうは思えない。毎年大きくてりっぱな甘い梨である。私はこんな二人に育ててもらった。

毎年丹念な作業を繰り返してきた二人も、もう年である。あと数年しか梨をつくることはできないだろう。残年ながら跡を継ぐ者はいない。いや、二人の跡を継ぐことができる者はいない。

もう20年以上も前になる。これは、イタリア、ローマ日本人学校での全校朝会にて私が話した内容を同僚の先生に頼まれて原稿にしたものである。保護者向けの学校だよりも載せた。

異国の地に赴いた1学期の話である。児童生徒を前に、福島のことを直接紹介するのではなく、自分の両親のことを話した。なぜそうしたのは覚えていない。遠く離れてみて、親のありがたみがわかったのかもしれない。

今年の梨はだめだった。先日、母親が気弱に「今年はだめだ」と言っていた。花が咲くときの天候がよくなかったらしい。母が「こんなのは初めてだ」と言っていた。小さい母が余計に小さく見えた。

梨をつくる二人がそろわなくなって、まもなく3年になる。父親が存命であれば、果たして何と言っただろうか。やはり「今年の梨はだめだ」だろうか。そもそも父親が「今年の梨はいい」などと言ったことを聞いたことがない。自分にも梨にも厳しい人だった。